

中国貨幣の歴史

28 宋代の貨幣⑥—宋代における銀の流通—



ぎんてい
銀錠

銀は品位と重量を計って用いる秤量貨幣として地金の形で使用され、「錠」、「餅」、「牌」、「葉子」などの形状のものが知られるが、そのうち代表的な「錠」は「銀錠」（後に「銀錠」）と呼ばれ、五十両（写真）や二十五両、十二両など一定の重量に鑄造された。

宋代、銀が貨幣として広く使用されるようになり、銀は銭貨と並び重要な役割を担っていく。商品経済の発展により高額取引、遠隔地取引に適した貨幣への需要が高まり、銭貨の鑄造量減少や国外流出により銭貨の流通量が減少したことが、銀の貨幣としての流通を促す要因となった。

銅銭の大量鑄造・発行によって銭貨統一を実現し、貨幣経済が浸透した宋代の特色として、交子、会子といった紙幣の出現とともに、銀の貨幣としての使用の拡大が挙げられる。

銀は、「前漢」(紀元前 202～紀元後 8 年)の武帝や「新」(8～23 年)の王莽の時に貨幣としての使用が試みられたが、実際に使用されるには至らず、貴金属の金とともに宝物・装飾品として扱われていた。唐代(618～907 年)になると、シルクロードを通じた西方交易による銀流入や国内での銀産出の増加を背景に、銀は次第に貨幣として使用されるようになる。もともと唐代における銀の流通は政府や王侯貴族等の上流階層内にとどまっていた。

宋代(960～1279 年)になると、特に 12 世紀初めの北宋末から南宋にかけて、銀は貨幣として社会全般で流通するようになり、銭貨と並んで取引上で重要な役割を担うようになる。この背景として直接的には、この時期、銅産出量の減少から銭貨の鑄造量が著しく減少し、銅銭の国外流出も加わり、銭貨の流通量自体が減少したという事情がある。そして何よりも、宋代は、商品作物の栽培や手工業が発達し、農産物や商品が全国的に流通して経済が発展したことが挙げられる。生産地と都市、都市間を行き来する「客商」と呼ばれる商人は、遠隔地搬送のコストが安く高額取引に適した銀を取引手段として利用するようになる。また、都市では庶民層の生活が向上し商業が繁栄した。唐代までは、都市の一部を商業区域と定め(「市」)、営業は昼(日午)から夕方(日入前七刻)までと定められていたが、宋代にこうした制限は撤廃された。都市のいたるところに商店ができ、夜市も行われ、貨幣需要は増大し、銀は大口取引などで使用されるようになる。政府が、租税の一部を銭貨に代えて銀で納税させ(「折納」)、塩などの専売品の支払いに銀を使用させたことも銀の流通を加速させた。新たに登場した紙幣との関連では、紙幣発行の裏付け・信用確保のために銀が重要な役割を担ったほか、大量発行による紙幣価値の下落は逆に銀の流通を拡大させる要因にもなった。

銭貨は原料生産から鑄造・発行まで政府が独占的に管理・統制したのに対し、銀の鑄造は民間に委ねられた。銀に対する政府の関与は産出した銀の一部を鋌山税として徴収する程度にとどまり、銀地金の鑄造は「金銀鋪」をはじめとする民間業者が担った。金銀鋪などの金銀取扱業者は、地金の鑄造や品位鑑定のほか金銀器の製造・売買を行い、両替など後の銀行につながる一種の金融機関の役割も果たしたといわれる。

銀は、その貨幣としての使用のはじめより、品位と重量を計って用いる秤量貨幣として地金の形で使用された。銀の形状として「錠」、「餅」(饅頭形)、「牌」(長方形の板状)、「葉子」(薄箔状)などが知られるが、唐・宋代の銀の主たる形状は分銅形や長方体の「錠」で、「銀錠」(後に「銀錠」と呼ばれた。銀は一定の重量に鑄造され、唐代以降では五十兩(約 1,865 g、1 兩 = 37.3 g)のものが多く、宋代末以降には二十五兩や十二兩のものも作られ、この大中小の 3 種類が一般的となる。

宋代に貨幣として広く流通しはじめた銀は、元代には政府の財政システムに組み込まれ紙幣発行を支えたほか、明代には銭貨不足、紙幣価値の不安定さのほか、日本・南米産の銀の流入もあいまって、紙幣や銭貨に代わり重要な地位を占めるようになり、いわゆる銀経済化が進行していく。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

[参考文献]

加藤 繁、『支那経済史考証 下巻』、東洋文庫、1953 年

———、『唐宋代に於ける金銀の研究』分冊第 1・2、東洋文庫

日野開三郎、『日野開三郎 東洋史学論集 第 20 卷 東洋史学研究』、三一書房、1995 年

宮澤知之、『宋代中国の国家と経済』、創文社、1998 年